

## シマフクロウ保護林設定検討会が開催

知床はシマフクロウにとって最大の生息地域～



シマフクロウは、日本では北海道にしか生息していない世界最大級のフクロウですが、その大きな体躯もさることながら、生息には餌となる魚が豊富に得られる川と、営巣木となる大木を有する森林が必要なことから、その存在は豊かな自然の象徴ともなっています。以前は北海道の広い範囲で生息していましたが、その生息数は徐々に減少し、現在では北海道東部を中心に130羽程度しか生息しておらず、絶滅危惧種にも指定されています。

林野庁ではシマフクロウの保護・増殖を目的として、これまで8箇所、総面積約7,400haの保護林を設定してきましたが、今回、これまでで最大規模となる約1,600haの保護林を知床に設定することを計画し、その検討会を8月23日(火)、当センター2階の会議室で開催しました。

検討会では、五十嵐恒夫北海道大学名誉教授を座長として、シマフクロウの専門家や地元自治体の首長が参加する中、「知床半島は北海道のシマフクロウの半数近くが繁殖する最大の生息地域であること」、「当該地は繁殖地域の拡大・回復を目指す観点から重要な生息地であること」、「保護林内では営巣候補木となる樹洞のある大径木の保残や繁殖期間(1～6月)の施業を原則行わないこと」などが説明され、保護林の区域や森林の取扱い、巡視等のあり方等について様々な意見が出されました。

今後は9月下旬に2回目の検討会を実施し、今年度末に作成される網走東部森林計画書の施業実施計画書で指定される見込みです。



シマフクロウ

## ～ コエゾゼミが羽化していました ～

コエゾゼミは7月～8月にかけて出てきます。「ジーギー」という鳴き声が森の中にこだますると知床にも夏がやって来た・・・と感じます。

8月上旬の自然観察教育林でコエゾゼミが羽化の真っ最中でした。森のあちこちで一斉に羽化が始まっており、なぜこんなに沢山のゼミが一斉に羽化するのか不思議に思いました。

何年もの間(7年程度ともいわれている)土の中で幼虫として過ごし、この時期に羽化し10日間ほどの短い時を地上で過ごします。羽化する間は無防備で外敵に狙われやすい時でもあります。こんなにも沢山のゼミが一斉に羽化する姿を見て生命の神秘を感じました。



北海道森林管理局 知床森林センター  
〒099-4113 北海道斜里郡斜里町本町11番地  
電話 01522-3-3009 FAX 01522-3-3160  
ホームページ <http://www.siretoko.knc.ne.jp/>



(写真：チングルマ)

## 知床は今

知床ではヒグマやオオワシ等の動物達やシレトコスミレ等の植物達が目立ち、キノコ等の菌類は少々地味な存在ではないかと思えます。

しかし、キノコに代表される菌類は植物と動物と対等な立場の生物であり、森林の生態系の中で大変重要な役割を担っています。

キノコは落葉・落枝や動物の遺体などを腐らせて分解し栄養にして、森の土に還元し、それらは樹木や植物たちの養分になります。この様に、キノコは、森林の物質循環の中で分解者として重要な役割を担っているのです。

この他に、外生菌根といって、樹木の根にまとわりつき、共生するキノコもあります。共生することで樹木の根を病原菌から守り、根から水分や養分の吸収量が増やし樹木の成長が良くなります。そして、キノコは樹木から栄養をもらい、お互いに助け合います。

さらに、密生した苗や樹木の中で衰弱したものに寄生し枯死させ間引く事で、密生して育ちにくかった樹木を育ちやすくする働きをするキノコもあります。

さて、キノコから見た良い森林とはどんな森林でしょうか？キノコと森林の関係を見ると、樹木の種類が豊富な混交林が、キノコの種類も豊富です。一方、単一の樹種の森林ではキノコの発生数が限られてきます。

キノコは森林の中でどのような役割を担っているのかを考えながらキノコを観察してみるのもよいのではないでしょうか。



ミズナラの倒木に出るシイタケ

\*混交林とはトドマツなどの針葉樹や様々な種類の広葉樹が混じり合った森林です。

## 知床世界自然遺産登録記念事業

### 『歩こう！見よう！知床世界自然遺産の森林』を開催



8月7日（日）に北海道森林管理局主催で知床世界自然遺産登録記念事業「歩こう！見よう！知床世界自然遺産の森林」を実施し、100名近い応募者の中から抽選で選ばれた22名が参加しました。

まず知床横断道路脇に設置された世界自然遺産の看板除幕式を行いました。

報道陣も多数詰めかける中、参加者の皆さんは少し緊張しながらの除幕式でしたが、なかなか無い貴重な機会に立ち会えたと感動している様子で、式終了後に緊張もほぐれ笑顔で記念撮影を撮っている方もいました。

記念に設置された看板の前での記念写真  
その後、向かった羅臼湖では、気温もそれほど上がらず、霧もかかっていない、羅臼湖では希な絶好のコンディションでした。

風も微風だったため、途中にある沼では、水面に背景の山や樹々が映り込み、疲れを忘れさせる美しい景色を楽しむこともできました。特に三の沼では羅臼岳が映り込む「逆さ羅臼岳」を見ることが出来、多くの方が感激していました。

また、散策路途中に未だ残る雪渓に驚きの声を上げたり、道端に可憐に咲くゴゼンタチバナなどの高山植物を楽しんだり、皆さん普段なかなか来ることのできない羅臼湖散策を十分満足して頂いた様子で、快適に散策を楽しみ、知床の自然を満喫して頂きました。



知床峠で森林生態系保護地域について解説



三の沼の湖面に逆さ羅臼岳が見えました



羅臼湖に到着

## 第74回レクリエーション in 知床

### 「知床の森でキノコの秘密を探ろう」を開催

今回の森林レクリエーションin知床では、森林生態系を構成する一員である菌類に着目し、そのうち目に見えて確認できる「キノコ」の観察会を9月1日（木）に行いました。

とはいえ、キノコの世界は奥深く、その道に長けた人でないと手を出すことは難しいため、今回は北海道大学名誉教授の五十嵐恒夫先生を講師にお招きしてご指導頂きました。

参加者は多数の応募者の中から抽選で選ばれた、50～60代を中心とした男性10名、女性14名の計24名です。



事前にセンター2階で基礎的な知識を学びました



チチタケ属のキノコを説明する五十嵐先生

まず、参加者は、当センター会議室にて30分程度、五十嵐先生より森林とキノコの関わりについての解説を聴きました。その中には「菌類は動物や植物と対等な立場の生物であること」「森林生態系において分解者であるとともに、菌によっては、樹木に栄養を渡してお互いに助け合う共生関係のものがあること、衰弱した樹木を枯死させることで森林内の樹木の本数調整の役割も果たしていること」などから、いわば『キノコは森のコーディネーター』であるとの説明があり、参加者は先生の話に熱心に耳を傾けていました。

その後、バスにて知床自然観察教育林に移動しキノコの観察会を行いました。

現地では、数多くのキノコが発生しており、散策路沿いで確認できるキノコの中には、花びらのような形をした「ハナビラタケ」や、白い乳液を出す「チチタケ」、セミの幼虫に寄生して発生した冬虫夏草「セミタケ」等、大小色とりどりのキノコを楽しむことが出来ました。

キノコの観察を通じ、様々なところに菌類の活動が確認できることがわかり、世界自然遺産の登録に際し評価された知床の「生態系」において、菌類も重要な役割を果たしていることを深く理解して頂いた様子でした。



トドマツの根元にハナビラタケがありました